

●ゆまにて選書

大岡信

古典のころ



א
ב
ג
ד
ה
ו
ז
ח
ט
י
כ
ל



ゆまにて出版刊行の辞

全地球の危機が語られている今、日本もまた、その危機感の流れの中に惑い、指導理念を喪失し、歴史ある文化・哲学を忘却し、道徳も、また見失っています。そして一時の高度成長に酔って、ぜいたくという情性の中で生活している現状です。そのあげく、人間としての善悪の判断まで難しくなってきたようです。かつて私たちの祖先は自然を尊び、信仰・文化・芸術のなかにきびしさによる厳びを見出し、美と伝統と精神の追求にたゆみなく勉めて居りました。

ゆまにて出版は、激しく速い現代社会の潮流の中で、ともすれば物質文明の枠に喘いで、生きる厳びと、人見失いつつある若い世代の人びとに、魅力ある人間像を創造するため、そへき素材を提供しようとするものです。の価値は作者や出版社の心に、いささではありません。また読者の心に何をたかよってのみ評価されるべきです。で刊行された本が読者自身の精神と歴史を念願してやみません。

常泉隆介

古典のこころ

定価1300円

1983年9月15日 初版発行

著 者 大 岡 信
発 行 者 常 泉 隆 介
発 行 所 株式会社 ゆまにて

東京都千代田区平河町1-4-12中政連ビル 〒102

電話03(264)4541(代表) 振替 東京 1-115812

印 刷 ベーテルフォート印刷(株)

製 本 市 川 製 本 所

© 1983 Makoto Ōoka, Printed in Japan

落丁乱丁本は、お取り替えいたします 0095-000205-8638

はしがき

「古典というのは何だろう」

「ウーン、一人無人島で暮らさなくてはならなくなった時、後生だいに持っていく本かな」

「たとえば」

「たとえば聖書にプラトン、論語に万葉集、法華経に資本論」

「ふだん決して読まないくせに、読まなくちゃあいつも思っている本ばかり」

「それだけではないさ。読むのに時間がかかるからいい」

「どの本も退屈だからなあ」

「孤独と無聊を退治するのに、退屈な読書をもってする。人格修養には絶好だろう」

「無人島に一人で暮らさなきゃならんようなときに、人格なんてものがなんで問題になるのかね」

「それがわからないようでは、はじめっから古典を読む資格もない。心掛けが悪いよ」

「わかった。古典てのは、要するにオレには関係ないんだ。ハハハ」

「じつはオレにもな、フフフ」

閑人の愚談はさておき、「古典」という言葉は近ごろどんな響きをもって人々の脳裡にころがりこむものであろうか。私が中学生、旧制高校生であったころと現在とでは、三十年以上の時の

へだたりがあつて、本というものについての一般的な感じ方にも、大きな変化が生じてきたことを折りに触れて痛感するから、今どき「古典は若いうちにきちんと読んでおきたまえ」などというお説教に耳傾ける若者が、日本国中さがしてみて、果たして十人もいるかどうか、甚だ疑わしいと私は思っている。

実をいえば、この私自身、この世に生をうけてこのかた、「古典は若いうちにみつちりと」などという有難い教訓に、ただの一度も従つたことがないのである。だから私は、たとえば大学で学生を前に話さねばならない時でも、その種のことは決して口にしない。言いかえれば、教養としての読書という観念は、私にはついに縁のないものでありつづけた末、今にいたつた。それだけの余裕もない生活の連続だった、というのが実情だが、また自分一個で納得している考え方で言えば、読書というのとはもと、余裕があつてするものではないんじゃないかと思う。

もちろん、余裕がたっぷりあつて、本を読む時間も心の準備もできて、いざいざ、と本を手にすることができるなら、それはどんなに楽しいことだろう、と思う。そんな余裕が与えられたら、私にもじつくり読んでみたい本はある。山ほどある。しかし、そんな余暇はなかなかもつて与えられはしないし、また仮にそんな余暇が与えられても、もし私が「それっ」とばかりにねじり鉢巻をして本の山を崩しにかかるなら、何のことはない、それはもはや「余暇」に悠々自適する生活ではなくなつてしまい、「もう一つの仕事」が新たに生じるだけだろう。

だから、本を読むということは、人間のよくよく不思議な事業なのである。あわただしく便所

の中で読んだ本のページが、じつくり坐った机の前で読んだ本一冊よりもずっと有益だったというようなことは、いくらでもある。何が「古典」で何が「駄本」か、などという区別も、本来ありはしないのである。

はつきりしていることの一つは、私にとって「古典」は、私がかつて読んだものの中にしかないということ。それらが、いわゆる古典文学全集とか古典思想大系とかに含まれている本と、ある程度まで重なっていることは十分ありうるけれど、それも、こちらの都合が、その場合世間の一般規格に合致しただけのことで、根本は常に「こちらの都合」にあるのだ。そういう具合の付合い方をした本でないと、古典であろうがなかろうが、本というものの、ほんとうのところ、身にしみて大切なものではなくなくなってしまふだろう。

人間というものは、それくらい自己本位なのだと思得た方がいい。どこか自分の都合とは別のところに、世にも有難い「古典」さまが鎮座ましましていて、われわれはその前で是が非でもうやうやしくお辞儀をし、自分にとつてはどうもピンとこないような書物でも、我慢して読まねばならないのだ、などとは考えない方がいい。なぜなら、そんな中途半端な付合い方をしても、相手は決して秘密をあかしてはくれないからである。

自分の都合が大切だ、といった。そのことは、言いかえれば、自分にとって今何が必要なのかを明確に知っていなければならないということである。これは大変なことで、自己本位という立場を通すのは、人からあせい、こうせいと言われるがままに動くのよりは、遥かに難かしい。

むかし夏目漱石が「自己本位」の立場を貫くことの大切さと困難さを説いた時と、事情は少しも変らない。

以上、本を読む、そして何かを書くということが、幸か不幸か、一日の生活の大きな部分を占めるような変則的な暮らしをしている人間のいうことだから、いづれにしても大きな偏りがあるかもしれない。しかし、私は余裕をもって読書を楽しむよりは、たとえ大急ぎの斜め読みでも、自分にとって必要なことだけはがっちり我がものにしてしまふぞ、という心がまえで本と付合ってきた人間なので、今さらきれいごとを言うわけにもいかないのである。

そんなやり方でも、ずいぶん多くの楽しみや余暇や喜びを、本の世界は私に与えてくれた。こちらに「余暇」がない時の、せっぱつまった読書でも、本の方から真の「余暇」を与え返してくれることが沢山あった。それこそ、実をいえば、本を読むということが私たちに与えてくれる最大の驚異なのである。そして、そういう関係で私と結ばれた本は、すべて、私にとっての「古典」となった。「古典」とは、私にとってはそういう意味である。

この本には、日本のいわゆる古典文学作品との付合いを通じて、私がどんな観点から、それを真に私自身の「古典」として認識したか、その筋道をのべた文章のいくつかを集めた。これらが触媒となって、読者自身がそれぞれの「古典」を見つけるきっかけになるならば、そこに一冊の本を編む大きな意味も喜びもあるわけで、そうなって欲しいとねがっている。

一九八三年八月

著者

古典のこころ ■ 目次

I

一 古典と私

二 うたげの場に孤心をかざす

古典文学にみる「うたげ」の場

和歌の日本におけるありかた

一人の人間の個性は限られている

「日本人のこれは何というすばらしい発明か！」

日本の詩の歴史を考え直してみよう

和歌の歴史の中から

うたげの世界で孤心を磨く

三 和歌の中の花

花の散り際——日本の美意識のポイント

世阿弥の能楽論の根底にも花の思想

『万葉集』の花は今や盛りと咲く麗しい梅の花

華やかに豪勢に散る桜の花が『古今和歌集』

精神世界に散る花に無常観こめた『新古今和歌集』

四	古今集の位置	96
五	古今集の撰者たち	115
六	古今集の歌風と女性の力	136

II

一	『万葉集』とわたし	158
二	『平家物語』のころ	174
	死の描きかたについて	
三	三世阿弥の「花」	185
四	歌と物語と批評	204

I

一 古典と私

僕がはじめて自分の意志で読んだ日本の古典は、岩波文庫の『竹取物語』と『伊勢物語』ですが、それ以前に『古事記』を拾い読みしたことをおぼえています。

中学三年の夏までは戦争下だったんですが、中学に入ってからすぐの頃、たぶん学校で『古事記』を読まされた。勿論ごく一部分ですけど、それが比較的わかりやすい文章の感じがして、こんなものなら読めそうだと思います。たまたま親父の書齋に文庫本で『古事記』があったわけです。昭和の初め頃に出た文庫本で、与謝野鉄幹、晶子、正宗敦夫編纂の「日本古典全集」の一冊でした。それを拾い読みして、面白いなと思いました。

僕らの小中学生の頃には、万世一系の天皇をいただく輝かしい日本というものを誇らかに語る、皇国史観によって教育が行われていたわけですけれど、そういうところでは教わらない世界が、教科書に載っていない『古事記』の他の部分にはたくさんあって、それが非常に面白かったわけです。女性の生理についてあからさまに書いてある文章としても、これがはじめて眼にふれ

たもので、記憶に残りました。

『竹取物語』や『伊勢物語』は、たぶん中学四年のときですから、戦後になって読んだことになります。その頃まあ受験ということで、塚本哲三というすぐれた国文学者の書いた『国文解釈法』という受験参考書を読みました。これは、当時旧制高校を受験する者なら必ず読まなきゃならなかったような本で、実際、大変面白く編纂されていた。僕は、それを古本屋で見つけてきて、古典の受験勉強に関しては、それ一冊で済ましたわけです。その中で使われている例文が非常によく編纂されていたし、それらの解釈や訳も面白かった。

塚本さんは大正から昭和にかけての日本の古典文学関係の講座ものや全集ものにたくさん関わっている人で、有名な「有朋堂文庫」も塚本さんが編集人になっているんですね。そういう人の編んだものだから、受験参考書といっても味がちがった。読んでいううちに、国文学というものも案外面白いじゃあないかと感じさせるものがあつたわけです。それ一冊で大体、日本の古典の入口の部分は案内してもらった。

で、こんどは一冊を通して読んでみようと思って、岩波文庫の『竹取物語』と『伊勢物語』にとりついたわけです。両方とも薄い本でしたからね。『竹取物語』はまあ読めるんですが、『伊勢物語』は難しかった。しかし、そこに出ている歌にはひかれました。

その頃から旧制高校にかけての時期に、僕がある種の影響を受けたと思うのは、堀辰雄です。『かげろふの日記』や『更級日記』その他、古典文学の堀辰雄版といったものや、エッセイ

集などいろいろ読みました。古典の翻案みたいなものにはそう感心しなかったように思うけれど、エッセイで語られている堀さんの古典への接近の仕方は、僕にもなんだかとてもよく理解できるものと思われた。堀辰雄は、ブルーストその他、フランス文学を愛読していましたし、リルケがフランス語で書いた『窓』という詩集の訳などもやっています。『ドゥイノの悲歌』について書いた文章など、今でもよくおぼえてます。

そういうヨーロッパの作家や詩人を論じる一方で、堀辰雄は日本の古典に近づき、入っていったわけですね。堀辰雄のそういう文章の影響もあって、僕は初めから、古典を読むのと外国文学を読むのは、そう別々のものじゃないという気持ちを持っていたわけです。

旧制高校では最初の国語の教材が『万葉集』でした。戦後すぐの時代で、教科書も特になく、『万葉集』と名のつく本なら何でもいいから持ってこいと言われて、親父の書棚から探し出してきたわけです。『万葉集』と、それに『新古今和歌集』を。両方とも岩波文庫なんですけれど、ただ大型本でね。つまり版ヅラは文庫本のままだけれど、本の大きさは四六版くらいという、俗に教科書版といわれていたものです。余白が多いから、教室で先生が言うことは全部、そこへ書き込めるわけです。今でもあの型のものがあると便利だと思う。教室から寮に帰ると、こんどは『新古今和歌集』を拡げて読んでいました。

一方でフランス語を習い始めていて、一年の終り頃には、わからないながらにボードレールなどを読んでいたはずです。ボードレールと『新古今和歌集』とのあいだに、ある種の照応し合う

ものを見つけては喜ぶといった、そんな読み方をしていたと思います。

ちょうどその時期に、『世代』という雑誌に中村真一郎、加藤周一、福永武彦の三氏が連載した文章がまとめられて『1946・文学的考察』という本になって出ましたけれど、この人達がまあ堀辰雄の系統だから、堀さんと同じような古典の読み方をやっていたんですね。たとえばダントを論じながら、同時に藤原定家を論じるといようなね。中村さん達は大変博学だったから、僕の知らないいろんな名前が出てくるし、そういう点では閉口しましたけれど、古典に対する接近の仕方としては、僕はこの本からもある種の影響を受けただろうと思います。

しかし概して言えば、僕はフランス文学の方に関心が行ってましたから、読むものも、その系統のものが多かったわけです。寮にはいろんな文学青年、哲学青年がいて、上級生では日野啓三、山本思外里、浜田泰三、森本和夫、村松剛、工藤幸雄とかですね。同級生には稲葉三千男、佐野洋（当時は丸山一郎）、最近亡くなって僕が追悼の詩を書いた『薤露歌』、『悲歌と祝禱』所収）重田徳などがいました。そういう人々のほとんどが、日本の古典に対しては興味がなかったんですね。戦後すぐの時代には、とにかく日本的なるもの一切が、青年の眼には疑わしく、唾棄すべきものに見え、一日も早く撲滅すべきものだというくらいに、日本の古典などに対する感情的な反撥があったんです。

僕自身の中にも、そういう気持ちは非常にありました。だけれども僕は、『新古今和歌集』を読み、ボードレールやランボーを読みながら、文学の世界の独自の網の拡がりみたいなものをば

んやりと考えていた。その網の目のひとつには『新古今』が引つ掛かり、もうひとつにはボードレーが引つ掛かるというような、精神的な意味での照応関係もあり得るんじゃないかと考えていたわけです。ずいぶん甘つちよろい考えなんだけれども、とにかく、全面的に日本のものは駄目だとも言ひ切れない。ただ、古典の扱い方や読み方は、今まで教わっていたものとは違ったものであり得るし、そうでないと意味がない、というふうに感じていたんですね。

高等学校の時期には詩を書くことが最大の関心事でしたし、自分の昨日の詩よりも新しいものを今日書けなければもう駄目だというくらいに思っていたから、日本の古典的なものの影響を受けるなどということは、全然考えられなかったわけです。藤原定家や式子内親王や俊成卿女の歌などは、読むたびに、実にいいものだと思っただけだ。おそらく『新古今』や『万葉』を読むことは、本能的にバランスをとろうとする作業だったんじゃないかとも思います。

大学受験の時には仏文科を志望したけれど、成績不良で国文科へ回されました。フランス語だけではいいと思って、ほかの勉強をほとんどしなかったわけです。とにかく仕方がないと思つて、大学へ通うようになってからは、仏文と英文の授業に熱心に出ました。面白かったのは、英文学の現代詩の講義などですね。国文科の授業は最低の単位だけは取れるように出たんです。考えてみると全く駄目な学生でした。

たとえば、池田亀鑑先生の『宇津保物語』のゼミをとったんですけれど、一回は皆の前で研究発表をしなきゃならない。それで、大学時代、毎年夏に行っていた箱根町の小さな郷土博物館

「閑所考古館」でアルバイトのような食客のような暮しをしながら、空いた時間に『宇津保』を読んでは、我流の作品構造分析をやった。秋になって僕が発表したのは、国文科の同級生達からすると、全く呆れ返るような不思議なものだったんです。

『宇津保物語』の本文には、長い年月のうちにある部分が失われてしまって、繋りがわからなくなったところがある、そのいわゆる錯簡をどう考えるかをテーマにしたんですが、僕は、池田先生の学問の基調を成す、いわゆるテキスト・クリティックの学などは全く知らないもんで、作家の創作心理を推察するに、ここはこういう排列でなければならぬというような、主観的断定に満ちた論を発表したんですね。セザンヌの画論から聞きかじった「レアリザシオン」なんて言葉を使って、大まじめにやった。池田さんは下を向いて、くすくす笑っていたようでした。国文学科でやっている学問が、僕には全然わからなかったわけです。特に池田先生の文献学的な、本文批評の厳密な積み重ねの学問は、僕のように傲慢かつ怠惰な学生には、とてもじゃないがわかるわけなかった。その出来事がある意味できっかけになって、ますます国文科の授業に出なくなるし、研究室へも顔を出さなくなっていました。

で、大学にいた間は、日野、山本、稲葉、佐野、金子鉄磨（神山圭介）、犬田れい子（現在の増田れい子）などと『現代文学』という文芸雑誌を出すことに専念したわけです。そこに僕は、主に詩とエッセイを発表しました。当時の詩のかなりの部分は『記憶と現在』のはじめの方に載っています。エッセイでは「菱山修三論」と「エリュアール」を書きました。「エリュアール」は一